

学校教育高度化センター後援事業

Marilyn J. Ivy 客員准教授活動報告

報告者 白石さや（教育学研究科 教授）

招聘期間2012年10月8日～12月8日

於 教育学部第1会議室

1. はじめに

M. アイヴィ准教授は、米国における文化人類学の研究および教育の揺籃の地であるコロンビア大学文化人類学科において、大学院教育の責任者を務め、また米国における権威ある文化人類学やアジア研究に関する学術雑誌の創刊や編集・査読活動において中心的役割を果たしてきた研究者であり、米国における日本文化研究に重要な影響力をもつ人物である。

研究者としてのアイヴィ准教授は、日本社会の近代化過程における戦争やその他の暗い思想的側面に目を向ける一方で、そうした歴史的経験が近代日本の美学の領域においてどのように表現され、また芸術としてどのような独自の展開をしてきたのか、深い洞察力をもって研究を重ねてきたことで知られる（*Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan*, University of Chicago Press, 1995他）。

今回の来日は、新しい研究テーマ「フクシマ後の日本における芸術と教育」にみるように、震災および福島原発事故後の日本における目覚ましい芸術創造および教育的情報伝達活動に注目して、東大教育学研究科に籍をおき、教職員や学生との日常的な交流の中で意見交換をする一方で、東北地方での現地調査を行うことを目的としたもの（添付資料Ⅰ）であり、実際に、授業での講演や学生との対話、個々の学生との意見交換、東京都内各所および関西での震災関連アート諸行事の参加調査、東北地方各被災地の現地訪問等々の活発な活動を行った（添付資料Ⅱ）。その調査研究活動の成果は「3/11 and the Arts of Catastrophe」とい

う報告書としてしてまとめられた。

2. 3/11のカタストロフィ (catastrophe) がもたらす芸術活動

3/11のカタストロフィとそれに刺激されて創造されてきた芸術的表象はどのようなものであるのか？今回のカタストロフィは原子力との関係性において決定的な特性をもつものとなった。メルトダウン、難民化した10万を越える人々、いまだ継続中の放射性物質の漏えい、こうしたことのすべてが限りなくイマジネーションを刺激する。このイマジネーションの爆発が、美学の理論や哲学が「畏怖 (sublime)」と名付けるものを導き出してきた。これほどの悲しみと怒りから、目を見張るような創造性と、精神的でさえあると言える芸術活動が東北地方を中心にしながらも、日本の各地で始まっている。

周知のように、戦後の日本はヒロシマ・ナガサキという「畏怖」される歴史を有し、同時に「原子力の平和利用」という名前でのアメリカによる原子力推進政策が実施される過程の中で、戦後日本の文化的生産物には常に消えることなく原子力が幽霊のように付き添ってきた。そして、そのヒロシマ・ナガサキのカタストロフィが、戦後日本のアート活動の出発点としての位置を与えられてきた。

今回のカタストロフィは、自然災害（地震と津波）に加えて原発事故という異なる二つの側面をもっている。この相異なる二相をどうやって統合させることができるのか？それはいつの場合にも、まず記録化 (documentation) から始まる。写真、

ビデオ、レポート記事、ドキュメンタリー演劇等である。そして記録化という活動は常に「その先」へと向かう。すなわちフィクションや神話の創造である。記録すること、記録の先に進むこと、このふたつは、喪に服し、恐怖の経験を確認し、そこから回復するための過程でもある。

こうして復興のための活動として、記録し、アーカイヴ化すること、被災した当事者と芸術家とが共に現地での創作活動を行うこと、こうした幾多の異なる芸術的政治活動がハイブリッド化した形態において、被災者と芸術家とを共に巻き込んで進行する。この活動に抛り、人々は喪失したものを記録として取戻し、さらに芸術として表現しようとする。水戸アートセンターにおける『3/11とアーティスト:進行形の記録』はまさに、この記録しようとする活動を記録したものとして出色の企画である。

3. 復興のイベント

上記のような芸術活動の他にも、潤沢な資金で開催された東京都によるオリンピック招致活動と抱き合わせのフェスティバルや、各地の美術館での作品展が目白押しで開催されている（添付資料参照Ⅱ）。しかし同時に、こうしたイベントはやがてカタストロフィを過去へと送り込み、蓋をしてしまうものでもある。復興を主眼として開催される、明るい、愛情に満ちた、協同に基づくイベントは、原子力の悪夢とそれがもたらした荒廃そのものを光源とする怪しいイルミネーションの灯に照らされて、やがて乗越えられていくだろう。ここでの危険性は、かのカタストロフィを、あまりに早く片付け去ってしまうことである。荒廃した冷たい沈黙の空間と時間とは、遅かれ早かれ、さまざまのイベントにおける人々の興奮と、歓声と、同志的体験と、復興への善意によって、埋め尽くされていくに違いない。そうした、カタストロフィを過去へと仕舞い込み、覆い隠してしまう諸イベントとが開催されていく。「カタストロフィ

の芸術」とは、それに抵抗をして、カタストロフィの恐怖と喪失とを忘れ去ることを拒否し、カタストロフィが現実には生起し、そこにまだ存在すること、それを指示し続けるものである。

4. アメリカにおけるポスト・フクシマの日本の文化状況理解の促進

この招聘において、アメリカにおける現代日本理解、特にフクシマ後の日本の新たな芸術創造表現および教育状況に関する理解は大いに促進され、今後も継続して研究交流が行われることが期待される。